

カラブリアの町々で — 南イタリア —

倉 田 稔

はじめに

大思想家トンマーズ・カンパネッラ（1568-1639）の跡を求めて、2015年10月にイタリアの旅をした。その一部だけ記そう。ここでは紙数の関係で、カラブリアに限る。カラブリア（Calabria）はイタリア半島の南端の州である。このころ1ユーロは135円ほどであった。

トンマーズ・カンパネッラは、聖職者、哲学者、詩人であり、「太陽の都」を著し、それは世界三大ユートピアの一つに数えられる。

もくじ

コゼンツア

レストランにて
バスの困難
コゼンツア旧市
新市
サマータイム

スティーロ

山の中
スティーロ
ドライブ
再び戻って

コゼンツア

ナポリ中央駅から12:55発の特急でパオーラへ向かい、15:05に着き、コゼンツア（Cosenza）に向かった。ここからはローカル線だから指定席はない。パオーラの駅で降りる時、隣に立っている初老のご夫婦が「自分たちもコゼンツアへ行くのだ」と言うので、ついて行くことにした。イタリアでは、列車を降りる時と乗る時にドアのボタンを押す仕組みである。パオーラ15:29発である。途中、ラメーツア・テルメで乗り換えである。そこに着くと、ご主人が先頭に立って、次の列車に乗り込んだ、するとアナウンスがあって、奥さんが、「それじゃない、急に変更になった」と言っていて、隣のプラットフォームの列車に乗り込むことになった。土地の人でも大慌てであり、この人たちについていなければ、我々はどういうことになったか分からない。コゼンツアに

15:50に着いた。ご夫婦は英語を話せないので、喋れなかった。中小企業の社長のような人で、奥さんは感じがよい人だった。

コゼンツアの駅に着くと、ホテルにも中心地にも近くはないことが、雰囲気でも分かった。そこでタクシーでホテルへ向かったが、かなり走った。15ユーロだった。ホテルに着くと、運転手は早速、カードを出して「帰りは私に頼んでくれ」と言った。だが荷物を下ろしてはくれない。後で分かったが、ホテルはコゼンツアでなく、隣町リンダであった。旅行社の手違いであろう。コゼンツアに来る日本人は少ないのかもしれない。

コゼンツアは古い町で、西ゴート王アラリック一世がここで没した。ブゼント川とクラティ川の合流地点にある。中世では、東ゴート、ランゴバルト領、ノルマン朝、ホーエンシュタウフェン朝、アンジュー朝、スペイン、オーストリア、ブルボンと、王朝が交代した。現在、コゼンツアは人口7万人とある。

レストランにて

旅装を解いたら、夕食の時間が迫った。ホテルのフロントで聞いて、レストランを推薦して貰った。「最近出来て評判のよいレストランです」と言う。「治安は良いのか」と聞くと、びっくりしたようで、「ここはとてもよい」と答えた。この驚きぶりから見て、安全な街だと思えた。ホテルのそばにスーパーがあるので、見物した。町によって、スーパー・マーケットとか、スーパー・メルカードとか、言い方が違う。かれこれ15分くらい歩いてレストランに到達した。

レストランには客が沢山いた。隣に若い男女が座っていた。私はワインのハーフを注文したが、ウェイターは間違えて大瓶を持ってきた。隣の若い男性に「飲みませんか」と言うと、「飲まない」とのことであった。ワイフはピッツアの小を注文した。ここはピッツア店であるようだった。ピッツアが薄いので、おいしかったそうだ。小は1ユーロ差し引く。私はスパゲッティにした。隣の男女は、しっかりフルコースを注文していた。女性は色々な国へ行ったそうで、「それらの国で外国語を覚えた」と言う。ワイフが男性に、「いいガールフレンドですね」と言うと、女性が「ガールフレンドではない、単なるフレンドだ」と否定した。ガールフレンドはヨーロッパでは愛人を意味する。

ワイフが勘定書きを見て、分からない項目があり、この隣人に聞いてみると、紙ナプキンや紙テーブル・クロスの代金であった。細かいというか合理的というか、驚いた。「イタリアでは空気を吸ってもお金がかかる」と、彼女は冗談を言う。お互いに写真をとり合っ、送り合おうと言って分かれた。後に送り合った。私は飲みかけのワインに栓をして貰って持ち帰った。イタリアではそれが出来る。帰りは夜暗くなっていたが、不安はない。

バスの困難

25日 このリンダ町のホテルはサービスの点で間抜けの所が多かった。大体田舎であり、客はイタリア人の老人団体が多かった。昼近くに、コゼンツアの旧市を見に行こうということになった。そこで分かったが、ホテルからは遠いのだ。タクシーにしようと思ったが、バスで行く

ことにした。

バス停を教わって探す、よく分からない。とうとうバス停らしいものがあったので、「これはコゼンツア中心地に行くか」と、通りがかりの人に聞くと、「行く」と言う。そこで待っていると、様子が変である。時刻表がない、バスらしいものが周囲を走っていない。そこで1人の中年男性が来たので聞くと、詳しく教えてくれた。「バスの右側通行と左側通行があり、ここはコゼンツアからは反対の方へ行く、だから駄目である」、そして、「向こうに見える大きなショッピング・センターのその向こう側にバスセンターがある、そこからは種々の方向へバスが出ている。それで行ける」と言うのだ。我々はそこで、言われた通り、ショッピング・モールに向かうと、それを越えるには右か左に大きく迂回しなければならない、

丁度2人のイタリア人がいたので、聞いてみると、威勢の良い声で、女性が教えてくれた、「ここから戻ったほうがよい。ホテルを越えて進み、有名な菓子店がある。その前にコゼンツア行きのバス・ストップがある」と。大変自信たっぷりで具体的なので、そうだろうと思って、引き返した。わがホテルの前を通り過ぎて行くと、しかし道が2つに分かれていた。手分けして我々は別の道を行きながら探そうということになった。ワイフの道が正しかった。だが、有名な菓子店の名はどこにもない、しかしバスストップはある。そこで数人の男性がいたので。聞くと、「そのバス・ストップ」だと言う。結局我々はそこで合流した。

しばし待っていたが、時間がありそうなので、その有名な菓子店をワイフが探すと、建物の二階にあり、看板は外からは全く見えないのだ。住民にとっては有名なのだろうが、それでは困る。

そのうち若い小柄な男性がバス・ストップにやってきた。スマートフォンや何かの電子機器ももっている。なかなかバスが来ないのでお喋りをしようとした。「コゼンツア中心地へ行くだろうか」、彼は「行く」と言う、「自分も行くのだ」、と。それで安心した。彼は英語が分からないので、難儀したが、ルーマニア人で、色々な国で働いたそうだ。25才くらいだ、彼はパスポートを見せた。イタリアの健康保険証も見せた。要するにガスト・アルバイター、外国人出稼ぎ労働者である。そのうち彼は、4という字を書いて見せた。我々は腕時計を見せて「4時ということか」と聞くと、「そうだ」と言う。4時にバスが来るらしい。これで我々はバスはやめた。2、3時間も待つ訳には行かない。さっそくホテルに戻り、タクシーを頼んだ。

それにしても、あのルーマニア人は何だろう。あそこで2、3時間もバスを待つのだろうか。今日は日曜日だから、街に遊びに行くのだろうか。今開催されているチョコレート・フェスタに行くのかもしれない。また日曜日とはいえ、イタリアのバスはなんと本数が少ないのだろう。

それにバスを教えてくれたあのイタリア女性は、何だろう。言っていることは間違いではない。大変な自信をもって我々を説得したものだ。しかし、見つかりもしない有名なケーキ屋を教えたり、ほとんど来ないバスを教えたりでは、問題である。

コゼンツアの旧市

タクシーは15分走り15ユーロで、コゼンツアの市役所そばに着いた。降りる時、運転手は、「皆、ドルミールしている、すべて閉まっている」と言う。イタリア特有の昼寝（シエスタ）である。本当に街は静まりかえっていた。

旧市外の方へ向かった。30分の循環バスがあると聞いていたが、バスセンターが分からなかつ

た。

近くにドミニカ教会があったので、じっくり見て、裏手まで回って見た。ここにトンマーゾ・カンパネッラが逗留したはずだ。というのは、カンパネッラは、当時の代表的な自然哲学者、コゼンツアのベルナルディーノ・テレジオ（1509-88）（*）の本を読み、感動し、彼に会いに来た。だがテレジオは既にその時、死去していて会えなかった。テレジオは、アリストテレスに反対し、感覚論、経験論を主張した。中世流のアリストテレス主義による自然観を排撃して、経験論的立場に立ち自然論を主張し、近代自然観の先駆者の1人となった。彼は、パドヴァ、ローマに出て学んだ後、コゼンツアに「アカデミア」を創設し、哲学、数学、自然科学などを教授した。弟子がペレシオである。

次に、川を越えると、自分の位置が分からなくなった。通りがかりの老紳士に聞くと、「重要な道があり、すぐそこから見所に行ける」と言うので、その道を歩いた。街は、古ぼけていた。幽霊でも出そうだった。家は数百年も前の木造・石像である。大聖堂に着いた。近くにテレジオというカフェがあったが、閉まっていた。そこをまた進むと、国民劇場まで来て、その前にあるコゼンツアの大学者ベルナルディーノ・テレジオの銅像を見た。これが目的である。

私は、くたびれて、銅像の前で休んでいた。ここまで急坂が続くのである。空が青く綺麗だ。イタリアの空はどこまでも青い。そこへ循環バスが偶然来て停まった。そこで、「途中からでも、これに乗れるのか」と聞くと、「お金を払えば乗れる」とのことである。市心まで下りて行くには疲れているので、料金を払って乗った、うまいことにお城の方に上がって行く。だからお城が見られると、喜んだ。それはノルマンの城である。しかし木々が邪魔してよく見られなかった。そしてバスは下り始めて、バス・センターに戻った。

新 市

旧市はこれで大方見たので、新市を少し見てみようとした。今、チョコレート・フェスタが開催されているとのことで、それを覗いてみようというのである。それは、市の1本の目抜き通りで行われていた。市の中心から順に歩いた。かなりの人が出ていた。昼寝の時間も終わったのか、日曜日だからか。祭りの端は、ホンダのバイクのテントであった。便乗であろう。次は、各種製品のテントであった。ここでレモン・リキュールを買った。知人から、「おいしいから飲むとよい」と言われていたものである。廻りの若い人たちが色々助けてくれた。それからは、チョコレートの店が続く。各種のチョコレートを見て楽しんだ。途中で喉が乾いたので、コーヒーを飲んだ。道路に椅子がおいてある。少し行くと、本屋があった。そこは閉まっていた。残念だなと、前で佇んでいると、店員がやって来て、店を開けた。ありがたい。夕方の開店時間だったのだ。ここでいくつか本を買った。支払いは小銭を望んでいた。イタリアでは大きい札は嫌うようである。その後、歩いていると、焼き栗が売っていたので、買うことにした。100g、1ユーロ、とあった。随分安いので、「本当か」と聞くと、「売るのは200gからだ」と言う。だが、それを買った。釜を覗いていたら、2つおまけをしてくれた。

その大通りはチョコレート・フェスタが続いているので、歩きながら見ていたが、そろそろ帰ることにした。「タクシー乗り場はあるか」と聞くと、「この近くにはない」とのことであった。流しのタクシーもないようだ。やむなくそばの婦人警官に「タクシーを呼びたいが、どうすればよいか」と聞くと、彼女は近くにいた救護班の女性たちに相談した。丁度、人命救助の演習を路上

カラブリアの町々で

でしていたのである。班の人たちは女性で、大議論が始まってしまった。結論は、1人がスマートフォンでタクシーを呼んでくれることだった。タクシーに待ち合わせ場所を指定し、そこは我々がよく分からないので、1人が一緒について来てくれた。親切である。ホテルまで15ユーロで着いた。

夕食を摂りに出かけた。ホテルのフロント嬢に聞いて出かけたが、なかなか見つからない。仕方なく、昨日のレストランへ行ったら、「今、店を閉めたところだ」と言う。やむなく、メトロポールというショッピング・モールに入って、食堂を探したら、ファスト・フード店が沢山ある。これでは余り食事する気に成らないが、仕方なかった。

フロントの女性に、「今日は、教わったレストランが分からなかったので、ファストフードを食べに行った」と言うと、うれしそうに、「よかったですね」と言う。全然よくない。どうも田舎らしい。それに、「その時の担当の女性は、英語がよく分からないのです」と、かの女は言う。

サマータイム

26日 コゼンツァから13:30発の列車に乗ることになっていた。そこで12時半にタクシーに来て貰うようフロントに頼んだ。そこで12時20分にホテルの前で待っていた。ホテルの若い魅力的な女性従業員が出勤してきて、玄関で突っ立っている我々に、快活に話し掛け、握手などした。「私はここに勤めているの、昨日二人をお見かけしたわ」と言い、とても愛想がいい。こういう人は、ロシアや中国のサービス業ではない。

さて、タクシーを40分待ったが来ない。不思議に思ってフロントに問うと、タクシー会社に電話した。すると「今日からサマータイムが終わって1時間時計が遅くなる」と言った。それを我々に伝えた。ワイフは怒って、「どうして教えてくれなかったのか、ここで待っているのが分からないのか」と騒いだ。マネージャーが来て、「マダム、どうしてそんなに怒っているのか」と。「サマータイムが終わったくらい教えてもいいではないか」とワイフ。マネージャーは「ここはヨーロッパだから」と。ワイフは「私は日本人だ、日本にはない」とやり返す。怒っているのは、他にも訳があって、サービスが悪いということだった。受付がレストランの場所をしっかりと教えてくれない、それは右と左をしっかりと英語で知っていなかったからだった。ベッドがやわらかすぎた、ぬれたタオルを交換しない、とか、これは指摘したら昨夜バスケットをもってお詫びに来たが。私も、便器にタバコの吸いながら入っていた、とつけ加えた。しかし「時間には間に合うから安心してくれ」とマネージャー。「駅まで5分で着くし」と言う。駅まで5分は何かの考え違いだと私は思った。それはありえない。だって来る時は15分も走って15ユーロもかかったからだ、

タクシーが来て出発した。しかし本当に5分ほどで駅に着いた、そして10ユーロだった。右側走行と左側走行とは距離が違うとのことだった。

コゼンツァ駅で、スティーロにどう行けばよいか、切符売り場の窓口で聞くと、窓口の女性は英語が分からない。すると、駅の上役のような人が出てきて英語で教えてくれた。「ラメーツィア・テルメで降りて、そこで人に聞きなさい」と言うのである。プラットホームで車掌に聞くと、「これはカタンツァーロ・リドまで行く」とのことである、ラメーツィア・テルメでは列車はそのまま方向を変えて進んだので、そこで降りて人に聞く必要はなかった。切符売りや、その類似

の人はよく分からないで、車掌に聞くのが一番正確である。一体、あの上役風の人は何だったのか。かなり無責任だ。

どこだったか、車掌が、「今度乗り換えの駅ではビナーリ2からです」と教えてくれた。親切である。ビナーリとはプラットホームのことであり、何度も見ているので、イタリア語で言われたが、分かった。とにかく列車に乗る時は、どのプラットホームから出るかを電光掲示板で見ておく必要があるの、気を使う。

ラメツィア・テルメ駅は今回2度も通った。ここは交通の要所である。1つ隣がアルトモンテで、トンマーゾ・カンパネッラが、スティーロの次にまずここで修行した。修道院がある。いつか訪れてみたい。

スティーロ (Stilo)

山の中

ラメツィア・テルメ14:44着で同駅を14:55発だった。ここからカタンツァーロ・リドへ15:38着いた。カタンツァーロが都会なのだが、カタンツァーロ・リドでないといけないので、注意した。ここで降りてスティーロ行きの列車のプラットホームを探すが、スティーロ単独の駅名はなかった。あるのは、モナステリア＝スティーロだけであった。他の列車運行先を見ても全くない。もうこれは仕方がない。16:20発の列車に乗った。

モナステリア＝スティーロへ17:01着なので、時間を見ながら外を見てみると、大変心配になった、地図によればスティーロは山の中にある。ところが列車はいくら走っても海岸沿いに行くだけである。山に入らない。これは違うスティーロか、またはスティーロに遠いところで下ろされるかのどちらかだ。列車は駅に着いてしまった。とにかく下りねばならない。駅名を見ると、モナステリアとしか書いてない。私は愕然とした。

どうすれば、スティーロに行けるのか、困った。駅のそばに店が開いているので、飛び込んだ。本屋だった。本屋だけあって珍しく理路整然とした説明をしてくれた。「スティーロは山の上にある。ここから15キロ先だ」と。これは後日確かめると、直線距離にしてであった。やはりそうだった。遠かったのである。「行く方法はありますか。」「ここからバスが出ている。最終です。7時15分発です。」私は混乱して、「もう出てしまったか」と聞く始末。「いや、これからです。」ほっとした。「どこからですか。」「ここからです。」「ここってどこですか。」イタリア人には具体的に聞かないと駄目だと思つたので、そうだった。彼は親切にも自分の店先だと案内してくれた。

ひとまず危機は脱出した。しかしよく考えると、あと2時間待たねばならない、立っているわけにゆかない。とにかく座る必要がある。近くにカフェがあったので、店外ですわってコーヒー・メランジュを頼む。ワイフが、ややあって、ホテルに迎えに来てもらってはどうかと提案した。そこで、電話をしてみることにした。だが公衆電話はない。カフェの店員に相談すると、スマートフォンで、かけてくれることになった。ホテルにつながり、私はここに来てくれるかを聞いたら、来てくれるとのことだった。カフェの若い店員に電話代のつもりで2ユーロ出したら、受け取らなかった。そこで駅前ですっと待った。だがなかなか来ない。30分ほど待ったので、

カラブリアの町々で

我々は、誤解されたのかもしれないと悩んだ。だがとうとう来てくれた。嬉しかった。地獄で仏のようだった。2人の人が車でやって来たのだ。車に乗り、山道をかなり走った。道はくねくね曲がっていた。15分で着くというが、バスだったら1時間かかるのではないかと思われた。ホテルは「キッタ・デル・ソレ」(Città del Sole)という。トンマーゾ・カンパネッラの主著の表題に他ならない。このホテルは私がネットで注文したのだった。日本の旅行会社は知らなかった。

迎えに来たのは、後に分かるが、1人がマネージャー格で、フランチェスコ氏 (Francesco, 以下、F氏と略称する)、もう1人が料理人のピーノ (Pino) 氏だった。送ってくれる車の中での話はこうだ。「我々のホテルは家族的である、客を家族のようにもてなす。カラブリアの豊かな食事を出す。肉、野菜、果物、カラブリアは豊富だ。」私は、「トンマーゾ・カンパネッラを調べに来た」という。F氏は言う。「先に、日本人の1カップルが来ていた。彼もそうだった」と。「私はあなたたちを、車で色々な所に連れていってあげる。タクシーでは高いから」と。「今日は遅いから、ホテルで夕食を用意した、それでもてなす」と。

山道がくねくねしていた。遠くからスティーロの綺麗な夜景が見え出した。街に入ると、F氏は、「昼食は街に2件レストランがあるので、そこでするとよい」、と指さす。

ここは三星ホテルであった。ついてすぐ夕食となった。ピーノは料理を作るのが好きだという。彼の作った料理だろう。トマトソースのニョッキ、山でとれたここ独自の山菜の煮たもの、トマトの野菜サラダ、ここでとれた牛肉のステーキと、いんげんに似た煮野菜、そして赤ワイン、終わって、大きなケーキ、そしてコーヒーであった。おいしいけれど、量が多い。ピーノ氏は料理がうまい。山羊のチーズも出た。山羊と聞いて、どうかと思ったが、製造方法がよいのだろう。ほとんど普通のチーズと変わらなかった。これで満腹となった。ケーキは甘くなくおいしく、コーヒーは絶品だった。ワインも少しとろみがあり、自然で、おいしかった。

スティーロ

カラブリアには沢山のリゾート地がある。暖かく、海が綺麗だからである。カラブリア州の南西にレッジョ・カラブリア県がある。スティーロはその県内にある。だからここはイタリアの南の南というわけである。スティーロ周辺はイタリア三大美観の1つでもある。

27日 ここで初めての朝食だ。種類は少ない。少なくとも十分である。

街を見に行くことにした。ホテルから市心へ向かう。300mくらいだ。その道は新しい。バスがすれちがえるほどで、「ローマ通り」という。この部分はまた新しい街だろう。雑貨屋、パールの酒、飲み物、軽食の店がある。市役所、八百屋、レストランがある。それらは道の片側だけで、反対河に建物は無い。

その先の、市の中心に広場がある。サン・フランチェスコ教会が広場にあり、その広場には、トンマーゾ・カンパネッラの銅像がある。この中心から、ヒストリコ・セントウルムが始まり、旧市内である。あるいは歴史的地区であり、中心から北と東に延びる。我々はここを散策することにした。

道は乗用車が1台通れるくらいの細さで、坂が多い、坂と坂を石段がつなぐ。初めにパールがあり、個人商店や、本・雑貨屋がある。個人スーパー、土産物店が時折ある。有名な泉が見えたが、小さい。その先はカテドラル、つまり聖堂である。トンマーゾ・カンパネッラが入ったドミニコ修道院へ行くつもりなので、人に聞くと、さらにまっすぐ行けというので、進む、中心から

15分くらいで着いた。

ここには、掲示板があって、トンマーゾ・カンパネッラがここにいたことを示す。写真を撮り、裏側にまわり、風景写真もとった。帰りに、お土産屋を見た。本屋もあったので、絵葉書と本も買う。散歩から帰って昼食をした。市内のレストランである。実際はトラットリアと書いてある。

ホテルに戻り、ちょっと休んでから、午後、散歩がてら郵便を送るため、郵便局を見ようとした。だが閉まっていた。ワイフは、ボタンをおすと、中から声がした。色々喋っている。「カピート？」(分かる)というので、ワイフは「ノン・カピート、我々は日本人です。」と答えた。後にF氏に言うと、「郵便局は1時半に終わるのです」とのことであった。

F氏に、我々はたくさん食べられないから、夕食は少なめにしてほしいというと、「残していい、料金は1人25ユーロと決まっている」とのことだった。

ワイフはカトリカ(聖堂)を見に行くという。F氏は、「遅いから、昼の方がよい」と言うが、出かけた。旧市内のカテドラルから、坂の小路をのぼって行く、カトリカまで15分くらいだった。想像や写真で見るとほど大きくも美しくもない。これは東ローマ帝国時代の聖堂である。

帰りは夕暮れになった。登ってくる時、トンマーゾ・カンパネッラの家という看板があったので、帰り道、そこを見に行った。カトリカからすぐだった。私は感動した。周囲をぐるぐる廻った。石造りの二階家である。

見終わったら、近くでオリーブの葉を取り除く作業をしている若い夫婦がいた。少しお喋りをした。迷うとまずいから、同じ道を帰ったら、市の中心に出た。ここの広場と周辺では、数人が、いくつものグループとなって、立ってお喋りをしている。広場といっても小さいものではある。人口を反映してか、中年・老人が多いようだった。スティーロは治安がよい。若者が都会へ出て行っているそうで、老人が多い、という。広場で語り合うのが、イタリア人の習慣だが、これは一日の一番楽しい時間であるように見えた、

夕食は、今度は魚だった。「なに」と聞くと、カジキマグロのソテーであった。ここではカジキがよくとれる。今度は白ワインになった。ところでケーキの量が半分になっていた。これは我々の希望が妙な形で実現されてしまったのである。

ドライブ

28日、F氏が10時からドライブに連れて行ってくれる。スティニャーノ町へ行く、カンパネッラの家を見に行く。スティーロからスティニャーノまで直線距離で9km、スティニャーノの人口は1000人。一方スティーロは2500人。多くの若者が街を出る。

カンパネッラの父は宗教問題で追われて逃げた、と。家族はスティニャーノからスティーロへきたのだ。当時スティーロに城壁があった。

スティニャーノは山の上に家が密集している。スティーロは山の中腹に家が密集している。南イタリアでは、このように山の上や中腹に街が作られる。これは外敵の侵入とマラリアの防止が理由らしい。外敵というのはイスラーム教国のことらしい。

スティニャーノのカンパネッラの家は中間的位置にあるようだ。だがスティーロのカンパネッラの家は最も高い所にある。カトリカの近くだ。だから最も不便なところだ。両方の家とも同じくらいの大きさだ。スティーロの守護聖人は聖ジョルジュで、トンマーゾ・カンパネッラのこの家から下の小さな広場にカンパネッラの銅像がある、

カラブリアの町々で

その後、プラカニカのドミニカ寺院を見る。ここは中に入れた。大きな修道院ではない。教会が付置されている。ここでカンパネッラは学んだのである。小さな町である。

F氏は「昼食にしよう」と言う。どこでするのかと、楽しみに思っていたら、わがホテルに戻ってF氏と共にするのだった。ワイフは、彼の昼食代はどうするのかと考えていた。今度は肉だった。肉は日本の牛肉からみると、柔らかくない。フルコースが出た。「昼からフルコースなのか」と、我々は食傷気味である。

午後のドライブが2時から始まった。「明日ホテルでコンフェレンスがあるので、今日にした」とF氏は言う。そこで、翌日はスーツで彼は出勤してきた。

午後のドライブとなった。ピヴォンジはスティロの隣町で、F氏が住んでいる。そこからかなり走って、モナステリ・サン・ジョン・テリステスを見せて貰う。これは山の中にあり、イタリア初めての正教教会である。1994年にイタリアで再開された。ここに信者がやってくる。大きくはない寺院で、十字架などの手作りの土産物も売っている。大変聖なる寺院だそうで、その聖職者とも挨拶を交わした。すぐその下に宿泊施設が建設中であり、F氏は、「景観を損ねる」と、怒っている。

次に、洞窟の教会を見る。サントゥアリオ・モンテ・ステッラという。大変大きな鍾乳洞の中に教会を作った。祭壇や椅子などがある。中央にマリア像がある。我々は鍾乳洞の上の方から入り込んだが、とても急な階段を下る。高い山まで資材をもってくるのは大変な労力だが、信者が作った。宗教は強い。この辺の景色は豪快である。

再び戻って

ドライブが終わって、ステーロに戻り、散歩し、帰ると、F氏から、「夕食はどうする」という電話があった。私は「終わった」と答える。だがワイフは、受話器を私がとりあげ、耳にあてるまで、F氏が「食事が準備できた」といった、と言う。これを私が断ることになったのではないかと。もしそうなら、まずいことになる。ワイフがあとで電話で確認したら、大丈夫とのことであった。

29日 朝早く起きて、郵便局に行く、そこで郵便用の箱を買う、ほぼ5 kg用の一番大きいのを2つ買った。10 kg用の箱はなかった。2つの箱に荷物をつめて、また郵便局へ行った。1人の女性は片言の英語を話す。局員は、日本に荷物を送ったことはないので、大変時間をかけて相談していた。日本向けの値段表がないようだ。F氏も来てくれた。船便は28日かかると、ナポリの郵便局では言っていたが、もっと早く着いた。

午後になったら閉まるかもしれない、まずいので、区役所へ行った、持っているスティロの地図が2つとも簡単すぎるからである。役所に人がいたので、「ボンジョルノ。シニョール」と声をかけ、用事をいうと、結局課長クラスの人に会わされた。「英語とドイツ語を私は話す」というと、「だめだめ、イタリア語で願う」と言うので、私は、英語とイタリア語と身振りで、話した。「私は日本の教授で、ステーロを勉強している、しかし、ステーロの小さい地図しか持っていない」と、私の地図を示し、「大きな地図を見たい」と要望した。彼は文書係の人を呼び、その部屋へ私を連れて行き、その人は地図を探し始めた。右手でスマートフォンを持ち、仕事の話をし、左手で地図を探している。やっとステーロの地図が見つかり、私はその写真をとった。

今度は本屋へ行った。ここは2度目である。店の初老女性は初めはやさしくなかったが、二度目は顔見知りになったのか、「ご飯食べたか」などと挨拶してくれた。よく見ると、気のせいかわいらしい顔の人だった。ここで本と絵葉書を買った。

広場に戻り、ワイフは若者が店でパンを買っているのを見て、同じように買って見た。まずコッペパンを買い、それを半分に切って、ハムやチーズをはさむのである。ハムはとて大きく、薄く斬るための機械がある。ハム1枚がとて大きいので、それを折ってはさむ。だから8枚くらいになる。これを昼食にして、部屋で食べた。ハムは新鮮で非常に美味しいものである。スーパーでリンゴを買ったら、昔の日本のリンゴみたいで、懐しく、おいしかった。

絵葉書・雑貨店が近くにあって店主とお喋りした。この近くの地形など教わって、絵はがきを買った。ワイフが小さなノートを買いたいと言ったら、プレゼントしてくれた。

料理人のピーノはいい人である。名前を聞いて、私は、「では、シニョール・ピーノ」、と言ったら、「とんでもない、私はプロレタリアだ」と応じた。シニョールは特別の意味を持つようだ。

旅行社の作った計画が早い出発なので、心配し、「送ってくれるか」と聞いたら、F氏は、「大丈夫、早くても車で送る」と言うので安心し、かつ申し訳ないと思う。出発日は時間がないので、もうホテル代を支払うと言ったら、握手を求められた。

散歩から帰って、フロントにF氏がいたので、「すべてを今支払う」と申し出たら、勘定書きを提出した。これは興味深かった。まず予約通りのホテル代、2人で4泊、320ユーロである。次に食事代で、我々が三回で2人だから150ユーロとF氏の1回10ユーロ、これはガイドをして、昼食をF氏がした代金で、いわば便乗である。車代150ユーロ、ガイドをしてくれて、「タクシーより安いですよ」、というのは、これだった。朝の送りが20ユーロ、労働時間外だからだ。

このうちドライブ150ユーロと送りの20ユーロは、ホテルの請求書には入っていないので、面白い。これは、ホテルを経ないで、F氏が直接得るものだろう。

夕食に出た。F氏はレストランが2軒あると言っていたが、1軒しか見当たらない、そこで、かつて入った所へまた入った。そこでは好きな物が注文できるからよい。面白い料理が出た。ワイフは魚のフライだ。ワイフは店の人と写真を撮り合ったりして、仲良くなっている。

30日、早朝6時の出発だ。5時起きして、5時半にフロントへ行ったら、皆起きていた。F氏はエスプレッソを飲む。余裕がある。車でまた、来た道を走り、モナスタリオ・スティエーロ駅に着いた。「ここはモナスタリアというから、修道院があるのですか」と聞くと、「小さな修道院があった。だが地震で倒れた」とのこと。F氏がワイフに言った、「これで日本からトンマーゾ・カンパネッラのために、2組のクレージー（物好き）な人がやって来ました。」1ヶ月前に来た人は、帰国して分かるのだが、東大名誉教授で物理学者のO氏であった。F氏は列車が来るまで見送ってくれた。南イタリアはアフリカのように暑いと、知人に脅かされてやって来たが、そんなことはなかった。

(*) ベルナルディーノ・テレジオ。(研究)、「哲学の歴史」4、中央公論。シュミット「ルネサンス哲学」平凡社。クリステラー『イタリア・ルネサンスの哲学者』みすず書房。

(参考書) Calabria, Touring Editone. Milano 2011.